

「国際総合科学部から国際教養・国際商学部・理学部 3 学部への再編、5 学部体制の構築（平成 31=2019 年）」について（国際教養学部立上げの視点から） ■質問項目 1. 上記の出来事について、その経緯や当時の大学の状況はどのようなものでしたか。 2. 上記の出来事を進められる上で、特に印象に残ってらっしゃること（良いこと・悪い ことどちらでも）はどのようなことですか。ご苦労されたこと等についてもご記載ください。 3. 上記の出来事による、その後の本学への影響・効果はどのようなものとお考えですか。 4. 本学の特色、良いと思われる部分、または気になる部分をご記載ください。 5. その他、上記の出来事や本学のことについて、ご自由にご記載ください。 ※ 最後に、未来の横浜市立大学を担う学生・教職員にぜひメッセージをお願いします。

以下、佐藤響子（国際教養学部）の回答です。

### 1. 3 学部への再編案浮上前（質問項目 1 + 4 へ）

2014 年頃（重田、岡田副学長が主導、学群長、副学群長、国際総合科学部長、共通教養長が出席）から八景キャンパスの将来構想を考えるミーティングが定期的に持たれ、共通教養長として参加した。その中では理系が国際総合科学部より独立したいという希望を表明。そうこうするうちに、このミーティングを飛び越えたどこかでデータサイエンス学部設置の準備が始まった。続いて、国際総合科学部を再編する話しが持ち上がった。大きな動きはいつもどこからともなくやってくる印象であった。その後のカリキュラム作成の段階でも、検討体制が整わない状態が続き、案を作ってはやり直すという作業が続く。

## 2. 3学部への再編に対する抵抗（質問項目2+4へ）

学部再編にかんして大きく問題になったのは、当時の4学系からいくつの学部に再編するかであった。国際都市学系は学部として独立したい意向が強く、教育思想（カリキュラム体系、指導方針）が異なる国際教養学系と同じ組織になることへの抵抗が水面下で様々な動きとなっていた。よって、3学部なのか4学部なのか、学部名をどうするのか、理事長、学長が方針を発表する会議はかなりの緊張感をもって臨んだのを覚えている。結果、2学系が1学部になることに大きな抵抗があったことを配慮した理事長、学長から、国際教養学部は1学部2学系体制にするという指示が出た。これによってカリキュラム体系の構築は進めやすくなった。ただし、ワーキンググループが作成したカリキュラムがダメ出しをされることが多く、思い通りの教育体系が出来たとは言い難い。最終的な目標地点が見えないまま検討を進め、「ノー」が出てきてはやり直し、という繰り返しが続いた。当初の案がつぶれたことが現在でも尾を引き、国際教養学部の特長が見えにくいという欠点につながっている。

## 3. 国際教養学部準備から発足（質問項目2+4へ）

発足の前年度(2018年)の夏に、当時の国際教養学系と国際都市学系合同のミーティングを開催した。新学部のカリキュラム体系の確認と開講準備を目的としていた。前述の通り、1学部体制への不満があったことから、どのようなミーティングになるのか不安なまま学部長予定者として臨んだ。ミーティングの空気は想定外に協力的であったことに心より安堵した。おかげさまで、2019年の学部発足後も新しいカリキュラムをよりよくするために

一人ひとりの教員が真摯に取り組んでくださった。2020年度はコロナ禍によるオンライン授業という未体験の取り組みへの不安の中で、それぞれが知恵と知識を惜しみなく出し合い、教育の停滞を最低限に抑えることができた。学部所属の教員の皆さんへの感謝は尽きない。

#### 4. 学生のこと、カリキュラムのこと（質問項目3+4へ）

名は体を表す。「国際教養学部」に入学する学生は、高校時代までに海外生活を体験していたり、多様なバックグラウンドを持っている学生が多い。コロナ禍で、留学プログラムを積極的に推進できていないことは残念であるが、それでもあきらめずに留学に挑戦する学生が出続けていることを頼もしく感じる。国際教養学部と名の付く大学では、留学を必須としているところもあるが、本学部ではそのような方針は取らなかった。単位上は、留学の代わりに第三外国語を履修するシステムがある。タイ語やペルシャ語を履修している学生が多い。使用レベルには到達しないだろうが、日本語、英語、第二外国語（ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、韓国・朝鮮語より選択）に続いて、もう一つ外国語を学ぶことになる。日本語と英語を点と点で結びつけて面的に比較する段階から、3つ、4つの視点を持つことで、多面的に社会、文化を見る視点を養うことができる。その強みは計り知れない身近に接することのない言語体系に接することを結構楽しんでいる様子がほほえましい。

メッセージ

公立大学には建学の精神といった強い思想がありません。運営方針、教育方針に時々の政

治状況が思いのほか反映します。直属の上長の指示もそれらに影響を受け、下の者は何を信じて実行すればよいのか迷うことの連続です。人として何が正しいのかという問いを常に突き付けられているように感じています。一人ひとりの真っ当な判断が今日の歴史を築いてきたのだと思います。ぜひ今後も本学の歴史が真っ当に積みあがることを願っています。

国際教養学部の教員は、研究と教育を愛している人たちの集団です。自分の領分だけを愛しているのではなく、お互いの研究や教育方法に耳を傾け研鑽を積むことにも熱心です。学生のみなさんは、素晴らしい環境をぜひ上手に利用してください。そして多様な学生との切磋琢磨を通じて、柔軟な思考を身につけて、世界に羽ばたく人材へと育つことを願っています。